

私の父と母

有島武郎

青空文庫

私の家は代々薩摩さつまの国に住んでいたもので、父は他の血を混えない純粹の薩摩人と言つてよい。私の眼から見ると、父の性格は非常に真正直な、また細心なある意味の執拗しつような性質をもつていた。そして外面的にはずいぶん冷淡に見える場合がないではなかったが、内部には恐ろしい熱情をもつた男であつた。この点は純粹の九州人に獨得な所である。一時にある事に自分の注意を集中した場合に、ほとんど寢食を忘れてしまう。国事にでもあるいは自分の仕事にでも熱中すると、人と話をしていながら、相手の言うことが聞き取れないほど他を顧みないので、狂人のような状態に陥つたことは、私の知っているだけでも、少なくとも三度はあつた。

父の教育からいえば、父の若い時代としては新しい教育を受けた方だが、その根柢をなしているものはやはり朱子学派の儒学じゆがくであつて、その影響からは終生脱することができなかつた。しかしどこか独自なところがあつて、平生の話の中にも、その着想の獨創的なのに、我々は手を拍うつて驚くことがよくあつた。晩年にはよく父は「自分が哲学を、自分の進むべき路として選んでおつたなら、きつと纏まとまつた仕事をしていたろう」と言つていた。健康は小さい時分にはたいへん弱い子で、これで育つだろうかと心配されたそうだが、

私が知ってからは強壯で、身体こそ小さかったが、精力の強い、仕事の能く^よ続けてできる体格であった。仕事に表わす精力は、我々子供たちを驚かすことがしばしばあったくらいである。芸術に対しては特に没頭したものがなかったもので、鑑識力も発達してはいなかったが、見当違いの批評などをする時でも、父その人でなければ言われぬような表現や言葉使いをした。父は私たちが芸術に携わることには極端に嫌^{きら}って、ことに軽文学は極端に排斥した。私たちは父の目を掠^{かす}めてそれを味わわなければならなかったのを記憶する。

父の生い立ちは非常に不幸であった。父の父、すなわち私たちの祖父に当たる人は、薩摩の中の小藩の士で、島津家から見れば陪臣であったが、その小藩に起こったお家騒動に捲き込まれて、琉球^{りゅうきゅう}のあるところへ遠島された。それが父の七歳の時ぐらいで、それから十五か十六ぐらまでは祖父の薫^{くん}育^{いく}に人となった。したがって小さい時から孤独で（父はその上一人子であった）ひとりで立っていかなければならなかったのと、父その人があまり正直であるため、しばしば人の欺^{あざむ}くところとなった苦い経験があるので、人に欺^{あざむ}かれないために、人に対して寛容でない偏狭な所があった。これは境遇と性質とから来ているので、晩年にはおおいおい練れて、広い襟^{きん}懷^{かい}を示すようになった。ことにおもしろがったり喜んだりする時には、私たちが「父の笑い」と言っている、非常に無邪気な善良

な笑い方をした。性質の純な所が、外面的の修養などが剥がれて現われたものである。

母の父は南部すなわち盛岡藩の江戸留守居役で、母は九州の血を持った人であった。その間に生まれた母であるから、国籍は北にあつても、南方の血が多かつた。維新の際南部藩が朝敵にまわつたため、母は十二、三から流離の苦を嘗めて、結婚前には東京でお針の賃仕事をしていたということである。こうして若い時から世の辛酸を嘗めつくしたためか、母の気性には濶達な方面とともに、人を呑んでかかるような鋭い所がある。人の妻となつてからは、当時の女庭訓的な思想のために、在来の家庭的な、いわゆるハウスイフと云うような型に入ろうと努め、また入りおさせた。しかし性質の根柢にある烈しいものが、間々現われた。若い時には極度に苦しんだり悲しんだりすると、往々卒倒して感覚を失うことがあつた。その発作は劇しいもので、男が二、三人も懸られなければ取り扱われないほどであつた。私たちはよく母がこのまま死んでしまうのではないかと思つたものである。しかし生来の烈しい気性のためか、この発作がヒステリーに変わつて、泣き崩れて理性を失うというような所はなかつた。父が自分の仕事や家のことなどで心配したり当惑したりするような場合に、母がそれを励まし助けたことがしばしばあつた。後に母の母が同棲するようになってからは、その感化によつて浄土真宗に入つて信仰が定まると、外貌が一変

して我意のない思い切りのいい、平静な生活を始めるようになった。そして癩癩てんかんのような烈しい発作は現われなくなつた。もし母が昔の女の道徳とらわに囚とらわれないうで、真の性質のままに進んでいったならば、必ず特異な性格となつて世の中に現われたいと思ふ。

母の芸術上の趣味は、自分でも短歌を作るくらいのこととするほどで、かなり豊かにもつている。今でも時々やつているが、若い時にはことに好んで腰折れを詠よんでみずから娛たのしんでいた。読書も好きであるが、これはハウスワイフということに制せられて、思うままにやらなかつたようであるが、しかし暇があれば喜んで書物を手にする。私ども兄弟がそろつてこういう方面に向かつたことを考えると、母が文芸に一つの愛好心をもつていたことが影響しているだろうと思ふ。

母についても一つ言うべきは、想像力とも思われるものが非常に豊かで、奇体でないことをあるように考える癖がある。たとえば人の噂うわさなどをする場合にも、実際はないことを、自分では全くあるとの確信をもつて、見るがごとく精細に話して、時々驚くような嘘うそを吐つくことが母によくある。もつとも母自身は嘘を吐いてとは思はず、たしかに見たり聞いたりしたと確信しているのである。

要するに、根柢において父は感情的であり、母は理性的であるように想ふ。私たちの性

格は両親から承け継いだ冷静な北方の血と、わりに濃い南方の血とが混り合つてできている。その混り具合によつて、兄弟の性格が各、自異なつているのだと思う。私自身の性格から言えば、もとより南方の血を認めないわけにはいかないが、わりに北方の血を濃く承けていると思う。どつちかといえば、内気な、鈍重な、感情を表面に表わすことをあまりしない、思想の上でも飛躍的な思想を表わさない性質で、色彩にすれば暗い色彩であると考えている。したがつて境遇に反応してとつさに動くことができない。時々私は思いもよらないようなことをするが、それはとつきの出来事ではない。私なりに永く考えた後にすることだ。ただそれをあらかじめ相談しないだけのことだ。こういう性質をもつて、私の家のような家に長男に生まれた私だから、自分の志す道にも飛躍的に入れず、こう遅れたのであろうと思う。

父は長男たる私に対しては、ことに峻酷な教育をした。小さい時から父の前で膝をくずすことは許されなかつた。朝は冬でも日の明け明けに起こされて、庭に出て立木打ちをやらされたり、馬に乗せられたりした。母からは学校から帰ると論語とか孝経とかを讀ませられたのである。一意意味もわからず、素読するのであるが、よく母から鋭く叱られてめめそ泣いたことを記憶している。父はしかしこれからの人間は外国人を相手にする

のであるから外国語の必要があるというので、私は六つ七つの時から外国人といっしょにいて、学校も外国人の学校に入った。それがために小学校に入った時には、日本の方が遅れているので、速成の学校に通った。

小さい時には芝居そのほかの諸興行物に出入りすることはほとんどなかったと言っているくらいで、今の普通の家庭では想像もできないほど頑固であった。男がみだりに笑ったり、口を利くものではないということが、父の教えた処世道德の一つだった。もつとも父は私の弟以下にはあまり烈しい、スパルタ風の教育はしなかった。

父も若い時はその社交界の習慣に従ってずいぶん大酒家であった。しかしいつごろからか禁酒同様になって、わずかに薬代わりの晩酌をするくらいに止まった。酒に酔った時の父は非常におもしろく、無邪気になって、まるで年寄った子供のようであった。その無邪気さかげんには誰でも嘔き出さずにはいらなかった。

父の道楽といえは謡ぐらいであった。謡はずいぶん長い間やっていたが、そのわりに一向進歩しないようであった。いったい私の家は音楽に対する趣味は貧弱で、私なども聴くことは好きであるが、それに十分の理解を持ちえないのは、一生の大損失だと思っている。

青空文庫情報

底本：「惜しみなく愛は奪う」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年1月30日改版初版

1979（昭和54）年4月30日発行改版14版

初出：「中央公論」

1918（大正7）年2月

入力：鈴木厚司

1999年2月13日公開

2005年11月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

私の父と母

有島武郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>